
紅い月

麻道 傾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い月

【Nコード】

N0907N

【作者名】

麻道 傾

【あらすじ】

静見 昇しずみののぼりは、おそらく一般人だ。

もしかすると超能力者かもしれないが、誰もそうである証明をすることはできない。

能力を使用する条件は、

?空に紅い月が昇っていること。

?自分が最も大切に思っている自分以外の人間の生き血を飲むこと。

?血を飲んですぐに、月に堕ちると願うこと。

この3つの条件を満たせば、月は堕ちてくる……らしい。

もちろん静見が能力を使おうとしたことはない。

だから本当にそんな能力があるのかも分からない。

けれど……いや、だからこそ、静見は紅い月が昔から嫌いだった。

これは、そんな少年の青春時代を描いた物語だ。

prologue

昔から紅い月は嫌いだった。

白い月と違って、その妖しい光り方は俺に錯覚を起こさせる。

『紅い月は生きているのではないか？』

荒唐無稽な話だと分かっているが、紅い光はどうしても”生”を起草させる。

小さい頃は、紅い月が堕ちてきて死んでしまうのではないかと、いつも怖がっていた。

十歳を過ぎた頃からちよつと前までは、紅い月に監視されているような気がして、気分が悪かった。

そして最近、いつまで待っても堕ちてこない紅い月に、いつまで経っても墮とすことができない月に、苛立っている。

そもそもものきっかけは忌々しい母親にあるのだが、故人を悪く言っても意味などない。穢れた自身の姿を目の当たりにできるくらいだ。

穢れきった俺は、退屈な毎日をただ漫然と生きているだけだった。

あいつに出会うまでは。

冬のある日 1

朝起きて、まず落胆する。

「ああ、今日も世界は終わっていないんだ」と。

「まだ紅い月は堕ちてきてくれないんだ」と。

二週間前に目覚まし時計が壊れてしまっただけからは自前の体内時計に頼って起床している。もちろんちゃんとした時間に起きられるはずもない。

体温で温められた布団に入ったまま、掛け時計を確認すると時刻はすでに八時半すぎだった。今日も遅刻は確定。

布団を蹴り飛ばすと冷やされた外気に肌がさらされて脳の起床が助長される。

ジャージ姿のまま立ち上がり、窓を開けてベランダに出る。

「うっ、寒っ」

冷え切った冬の空気が眠気を吹き飛ばす。吐く息は白く濁り、吸う息は鼻の奥に鋭い痛みを残す。気温は十度もないだろう。

見渡す町並みは最近、慣れ親しんできたものからどんどん変化していつてしまっている。空き地や緑が減った代わりに背の高いマンションが増えてきた。遠くには霞む山々が見える。

「はあ〜」

吐く息が白いのは昔から変わらない。息を吸うのが痛いのも同じ。吸うのを我慢すると苦しいのも昔からだ。当たり前のことだけだ。

だから、変わってしまったのは俺ではなく、周囲なのだろう。

天気は曇り。空は灰色に覆われ、日は顔を出さない。そのことが今朝の冷え込みに拍車を掛けているのだろうが、文句を言う相手など何処にもいない。月が堕ちないのと同じように、人間にはどうし

ようもないことが数多くあるのだ。ちっばけな俺にできるのは誰かに愚痴を聞いてもらうことくらいだ。

身体が冷えてきたのでそろそろ室内に戻るとしよう。

窓は開けっ放しにしてあったので部屋の温度も外とそれほど変わらない。布団に入れば話は違ってくるだろうが、今から二度寝する気にはなれない。

敷布団、掛け布団、共に畳んで部屋の隅に避けておき、部屋の壁に掛けてある学生服に手を伸ばす。

ジャージを脱いで、カッターシャツ、ズボン、学ランの順に着て、最後に学校指定の黒い綿のコートに袖を通す。

学校指定の鞆を持って部屋を出る。踏むたびに音が鳴る古い板張りの廊下を歩き、居間を素通りして玄関に達する。学校指定の真っ白な運動靴に足を通す。

学校というヤツはどうしてこんなにも生徒の格好を指定したがるのだろうか。

高校に入ればまだマシになるのかも知れないだろうが、中学校というのは本当に酷い。今、身に着けているもので指定されていないのは下着と靴下くらいではないだろうか。それだけでは飽き足らず髪型まで校則で数種類まで指定する始末。

本当に、分らない。

だから学校は嫌いなのだ。

内心だけで悪態を吐くと、俺は家を出た。

冬のある日 2

築四十年のボロアパートは、当然のように外装に関しても二流くらしいのボロさを誇る。

家の中は和室で統一されているのに、外に一步出れば赤サビに覆われた金属の床がお出迎えをしてくれる。

引越してきてすぐの頃は踏むたびにカーンと独特な音が鳴る金属床を面白いと感じていたが、今では部屋の中と外のギャップが滑稽にしか思えない。

「二〇五号室 静見」と書かれたプレートを一瞥してドアに鍵を挿す。

二階までしかないアパートの一番端の部屋、それが今の俺の家。鍵を回して施錠するとカチャリと音がなる。その音を確認して鍵を抜き、今日も今日とてカーンと軽い音を鳴らして歩く。

この音を聞いているとアパートの強度が心配になってくるから不思議だ。大きな地震が襲ったら一瞬にして崩れてしまうのではないだろうか。

まあ、二階の高さくらいなら落ちても死にはしないだろうといつも通りの安直な結論を出して無意味な心配を完結させる。

「なるようになるだろ」

呟き、金属むき出しの錆びた階段を下りる。ところどころ白くなっているのはサビではなくて鳥の糞だから踏まないように気をつけなければならぬ。

金属階段を降り終えると、やっと安定したアスファルトの地面に達する。人も車もまばらな寂れた田舎道を歩き出す。

通学路を五分ほど歩くと小さな公園がある。遊具は滑り台とシーソーくらいしかない。その他にあるのは、面積の五分の一くらいを

占める砂場、水飲み場と四人がけのベンチがひとつくらいだ。一分もあれば外周を一周できてしまうような小さな公園だが、そこで朝食の食パンを食べるのがここ二年くらいの俺の日課になっている。

小学生だったころは集団登校の集合場所になっていたこともあって、この公園にはすでに九年近くお世話になっている計算だ。

園内に踏み入り、地面がアスファルトから土に変わる。多少のぬかるみを残す地面を踏みしめてベンチまで歩き、腰を下ろす。学生鞆も隣に乗せる。

アスファルトは完全に乾いてしまっているようだが、日当たりがあまり良くないこの公園の土は、昨日の朝から夕方にかけて降った雨で湿っているみたいだ。それも仕方のないことだろう。北側以外の三方を民家に囲まれている上に、外周には背の低い木が植えられ、中心には樹齢五十年を超える大きな桜の木が陣取っているのだから、それでも木が葉を付けていないだけ乾きは早いだろう。

ベッドタウンとして開発が進んでいるこの地域に中途半端な大きさの公園が残っているのも、すべては桜の木のおかげかも知れない。花見のスペースがないのは玉に瑕だが。

「ま、そのおかげでオーナーは儲かっているみたいだからいいんだけど」

店の立地を自慢していた無精ひげのオーナーの笑顔を思い浮かべて、つい苦笑が漏れる。

「んじゃ、朝飯にしますか」

わざと大きな声で言って、隣に置いた鞆をゴソゴソと漁る。

五枚にカットされた食パンが入っていた市販の袋から今日の分を一枚取り出して、袋を鞆の中に戻してしっかりとチャックを閉める。こうしておかないと中を漁られてぐちゃぐちゃにされる挙句、残った毛玉の処理が大変だからな。

そうして俺がパンをかじり始めた頃、公園の隅の木がガサゴソと揺れて、中から二匹の茶色の猫が出てきた。そしてもう一匹、公園の隣の家の塀を乗り越えて、白猫が地面に着地。三匹はゆったりと

俺に近づいてくる。いつもならもう一匹砂場で日向ぼっこをしている黒と白が混ざったパンダみたいな奴もいるのだが、地面がべたべたするからなのか今日はいないみたいだ。

三匹の猫たちは俺の足元に寄つてくるとズボンに身体をこすりつけたり、猫パンチを繰り返したりしている。

『これが意外とよくれるんだよな』という心の声を飲み込みつつ、パンを咀嚼。余ったもう一方の手で三匹を順に撫でていく。茶色の二匹はそうでもないのだが、白猫は喉のところを指で搔くようにされるのが本当に好きだ。グルグルと気持ちよさそうに喉を鳴らして俺にすり寄ってくる。こいつはたぶん隣の家の飼い猫なのだろうが、首輪を付けていない。そのくせ喉の周りを搔かれるのは好きだといふよく分からない奴だ。まあ、喜んでくれるなら、それはそれでいい。

猫を撫で回しながらパンの八十パーセントくらいを腹に収めると、まずはひとかけらを千切り取って白猫の口元に差し出す。飼い猫に餌を与えるのはあまりよくないことも知れないが、一匹だけ与えないと怒って引っこ掻いてくるのでいつもひとかけらだけ食べさせている。

いつもはもうひとかけら取ってパンダ柄に食わせているが、今日はいないので残ったパンを二等分する。パンダの奴は野良のくせにいろんなところで餌を貰いまくっているらしく、太っている。それでもパンをあげないと怒るのでいつもひとかけら。

二等分したパンは地面において、茶猫二匹に。白猫が横取りしないように首根っこを掴んで膝に乗せ、頭を撫でてやる。

茶猫はこの公園に住み着いているらしい。朝早い時間や昼は、小学生がいたり幼児を連れた近所の主婦がいたりするので木の陰で寝ているみたいだけれど、俺が来るとパンをもらいに起きてくる。俺がパンを与えないと餓死するんじゃないかってくらい痩せているけれど、別に飢えているわけじゃない。数日間パンをやらぬ時もあがるが今でもちゃんと生きてるのがその証拠。

それでも茶猫二匹に多くのパンを与えてしまつのは俺の傲慢なんだろうな、と最近思うようになった。

「自己満足、なんだろうな」

曇り空を見上げながら独りごちる。

でも、自己満足で猫が喜ぶならそれでいいのかも知れない。いや、猫が喜んでいるならそれはもう自己満足とは言えないんじゃないや、「ニヤ

ー」

思考は猫の鳴き声で遮られる。

下を見ると茶猫二匹はパンを食べ終わってようすで、身体を俺の脚にこすりつけ、物欲しそうな声を出している。つぶらな瞳がこちらを見つめる。

「今日はもうねえーよ」

言つて、白猫をベンチに下ろすと鞆を持って立ち上がる。

白猫はニヤーと一声鳴いた後、道路の方へ歩いて公園から出て行った。おそらく玄関から家の中に戻るのだろう。興味はないので確かめたことはないが。

立つても相変わらず足元にいる茶猫二匹の首根っこを掴み、一匹ずつ砂場に放り投げる。二匹は華麗に着地を決めた後、俺を一瞥して公園の隅の木の下に帰っていった。

ベンチのすぐ横にある水飲み場で手を洗い、ついでに顔も洗う。

夏場はいいのだが、この時期の水は冷たくてしみる。

それでもこの習慣をやめようとしないのは、自分が変わってしまふことを恐れている故なのだろうか……。

正直なところ、よく分からない。けれどそれでいいと思う。答えが分かったところで利益がないのなら、疑問は疑問のままでも十分だ。学校を嫌う俺の足は、まだ学校には向かわない。

道路を挟んで公園の対岸にある喫茶店、俺の足が向くのはいつもそこだ。

喫茶店「FLOWER」それが俺が毎日のように通う店の名前だ。英語で「花」が由来。単純といえば単純だが、春になると正面の公園に咲いている桜をこの店の中から見るという花見客も増えるため、合っているといえれば合っているだろう。

要するに「可もなく不可もなく」というところだ。

「FLOWER」という明るい名前だけあって、店内は白を基調とした明度の高い色で統一されている。ただ、店内にある植物が観葉植物だけで花と呼べるものが一切ないのにはさすがに苦笑せざるを得ないが。

カランカランという乾いた鈴の音を立てるドアを開けて暖房の効いた店内に入る。

「らっしやーい」

明るい店に不似合いな、低く野太いオーナーの声。

「シズム、今日もお前はサボりか」

店内に他の客はいない。朝食としては遅く、昼食には早すぎるこんな中途半端な時間に来る客は珍しいのだ。

オーナーの目の前のカウンター席まで移動しながら返答する。

「サボりじゃなくて、朝寝坊したから遅刻なんです」

コートを脱いで背もたれの部分に掛けて席に腰を下ろすと、オーナーは温かいおしぼりを手渡してくれる。

「ありがとうございます」

お礼を言っ手て手を温める。真冬の水道水で冷えた手が生き返る。

「寝坊した奴は猫に餌やつてる暇ないと思うんだが？」

オーナーは俺を半眼で見て言った。

「……見てたんですか」

「今はウチの店に閑古鳥が鳴いてるからな。それにお前は毎朝餌やつてるんだから見るまでもない」

「まー、そうですね」

「んで？いつものでいいか？」

「はい、お願いします」

俺の返事を聞くと、オーナーは後ろを向いて早速コーヒーの準備に取りかかった。

「……あの、オーナー」

「なんだ？」

振り返らずに、返事。

「ものすごく自然な言い方だったんで突っ込むのを忘れていたんですけど、俺の名前は昇です。シズムじゃないです」

「いいじゃねえーか。あだ名だよ、あだ名。それにお前はいつも沈んだ顔してるんだし」

オーナーは笑いながら言う。いつも笑顔のこの人からすれば大抵の人は沈んだ顔ばかりなのではないか、と思うが口には出さずに別の反論をする。

「沈んだ顔って、すごく失礼ですよ」

「そうか？」悪びれもしていない様子で返事。「実際に、沈んだ顔してるんだから諦めるよ。嫌だったらもっと笑えってことだよ」

「そうですね」

論点がズレている議論をしても平行線を辿るだけだ。だから、いつも微妙に論点がズレているこの言い合いについては俺が引くことにしている。

「それにしてもお前の親父さんのセンスはすげえーよな。なんと言つても『しずみのぼる』だからな。沈むのか昇るのかはつきりしろって話だよな」

オーナーは他人の名前を笑いながらそうやって評する。失礼というより無遠慮なのだろう、この人は。……それに褒めているんだか貶しているんだかよく分からない。

静見昇、ひらがなでは「しずみ、のぼる」それが俺の付けられた名前。

「オーナー、子供の名前で遊ぶような親は間違ってもセンスがいいなんて褒められることはありませんよ。ただの偶然です」

「その偶然に乾杯」

オーナーは手に持った空のコーヒーカップを掲げる。

「まだ俺、コーヒー貰ってないんですけど」

「待って待て、もう少しだから」

ニイと歯を見せて笑ったオーナーはコーヒーをカップに注ぐ。コーヒー独特の香りがここまで広がってくる。

「それに……いや」

こんな話をこの人にする必要はない、か。

影のないオーナーの笑顔を見てみると、わざわざ訂正して暗い話をするのが馬鹿馬鹿しく思えてくる。

「……お袋さんだったか？」

オーナーはできたてのコーヒーを俺の前に出しながら小さく言った。

「え？」

「だから、名前の。お前、暗い顔してるからさ」

「……はい。母親が付けたものです」

返答を聞くと、オーナーは寂しそうに笑った。

「そうか、すまなかった。お前の前じゃ、お袋さんの話はタブーだったのに」

「いいんですよ、別に。オーナーが気にすることじゃないです。俺が個人的に恨んでいるだけですから」

「お詫びといつちやあなんだが、その一杯はタダでいいよ」

「どうせいつもタダ同然じゃないですか」

「ありゃあ、ちゃんとお前のバイト代から引いてある」

「ま、そうですね」

言って、出されたコーヒーに口をつける。深い香りと共にほろ苦い味わいが口内を満たす……満たす……満たすはすなんだけど……

満たさない？ むしろ甘い？

一度カップから口を離して中身の液体を確認する。

「って、これブラックじゃないじゃないですか」

「カプチーノだが？」

「いやいや、いつものやつって言ったらどう考えてもブラック出しますよね。俺、これでも常連ですよ？　好みくらい覚えてますよね？」

「いいじゃねえーか、どうせ俺の奢りなんだし。それに若いうちからブラックばかり飲んでると胃い傷めるぞ」

悪びれもしない明るい笑顔を向けられる。

「……分かりましたよ、ありがたく奢られておきます」

「おう、飲め飲め」

「居酒屋で部下に酒を勧める上司みたいな言い方ですね」

「いいんじゃないねえーの？　ウチ、夜は酒も出すし」

オーナーの論点はやはり微妙にズレている。

「ま、いいですけど」

再びカップに口をつけて、傾ける。

香りは文句なしで良い。味は甘いけど、美味しい。

「美味しいです」

甘いけど、の言葉はカプチーノの甘みと一緒に喉の奥に流し込む。

「そうか、そうか」

オーナーは笑顔。

無精ひげを生やしたおっさんに使う表現としては不適切かもしれないが、その笑顔は本当に花のような笑顔だった。

この店の名前はやっぱり「FLOWER」が相応しいんだろう。

そう思った。

カプチーノを飲み終わり、店内にある掛け時計を確認すると針はちょうど九時を指していた。二時間目が始まるまでまだ三十分以上もある。

ちなみにこの時計、短針と長針の先っぽがそれぞれ四枚の黄色と赤色の花弁になっている。二週間くらい前に、オーナーが通販で買ったのだと自慢していた。

なんというか、とても残念だ。まあ、確かに「花」だけど。もっと先にすべきことがたくさんあるはずだろうに。

本人はすごく上機嫌に話していたから、誰も指摘することはなかったが。

「注意することが大切」ってよく小学校の先生とかが言ったりするけど、注意しない優しさってあると思う。

閑話休題。

「オーナー、お水もらえますか」

「えー」

いや、なんでそこで嫌そうな返事するかなー。

「シズム、いつつ水飲まねーじゃん」

カプチーノが甘かったからと抗議するのは筋違いというものだろう。

「そうですね。つーか、俺は昇ですって」

「ま、どっちでもいいんだけどさ。氷なしの水道水でいいか？」

「大丈夫です」

返事を聞くとオーナーは後ろの棚からガラスのグラスを取り出してジャーと水道水を注ぐ。

一般のお客さんに出す水は水道水ではなく、塩素を抜いて薄いレモン風味にしたものだ。あの水はあれでなかなか癖になる美味さがあるからバイトの休憩時間に飲んだりしているが、取り立てて今飲

みたいというわけではない。オーナーが言うなら、遠慮とか関係なく水道水で十分だ。

「あいよ」

透明な水道水が入ったグラスがカウンターに置かれる。

「ありがとうございます」

出されたグラスを手に取ると、一気に水を飲み干す。口に残る甘さは喉に流れ込んで消える。冬場の水道水は氷を投入するまでもなく、冷えている。

「最近はやおー、冬場だつてのに氷は値下がりしないし、レモンは相変わらず高えーし。本当、あのスーパーはどうかしてるっての」
苦笑が漏れる。まさか同級生の父親の愚痴を聞くことになるとは、出会った頃には想像の埒外だったはずだ。

この人は子供っぽいというか、まだ若いというか。娘の同級生と友達感覚で接するくせして父子家庭でその娘を一人立派に育てているんだから不思議だ。

「仕方ないですよ、それは。向こうも商売なんですから」

オーナーはため息を吐いて続ける。

「そうだよな。別に良いんだけどさ、どうせシズムの時給で調節するから」

「いや、俺、昇ですって……………」

あれ？ 今この人衝撃的なこと口走らなかつたか？

「……………」

「あ、固まらなくていいよ。時給で調節するのは冗談だから」

「ですよねー」

オーナーは声を小さくして呟く。

「本当はシズムが飲むコーヒーの値段で調整してるんだけど」

「オーナー、しっかり聞こえてますからねー」

やる気のない声になってしまう。この人のテンションに着いていくことは俺には荷が重い。

「そう怒んなって。嘘だからさ」

「いや、怒ってないですって。それに俺だつてちゃんと貰った給料の確認くらいしてますから」

「ま、いいや。話は変わるんだけどさー、昇」

「はい？ なんですか」

オナーが俺のことを「昇」と呼ぶときはわりと真剣な話をする時だ。気分を切り替えて耳を傾ける。

「最近ウチのアヤカが落ち込んでるみたいなんだけど、クラスでなんかあつたりした？」

「い、いや、俺は知らないでしゅけど」

……噛んだ。しかも滅茶苦茶心当たりある話題だったから、ついオナーから眼を逸らしてしまった。

バレたな。

オナーの顔がニヤリと歪む。

「ほほおーう。昇は当事者が」

「ノーコメントで。というかそんなこと本人に直接訊けばいいじゃないですか」

「そーなんだけどよー。いくら訊いても『なんでもない』の一点張りだよ。これで同性ならこんなに悩む必要もなく、風呂入ってる時に突撃して、裸の付き合いの中で訊き出せばいいんだけどな」

「いや、同性でもどうかと思うんですが」

苦笑しながらも、胸の内では上手く話題が逸れてくれたと安堵する。

「だよなあ。最近の子供は裸の付き合い程度じゃ心を開いてくれないって言うし」

やっぱりオナーの論点は微妙にズレている気がする。

「俺が中坊だったころは風呂でサイダー飲みながら親父と好きな人について語り合ってたって言うのに」

「へ、へえー」

……まさか感動詞で噛みかけるとは思っていなかった。冬だといふのに背中に嫌な汗が流れるのを感じる。

「おつ、昇るが反応した。ってーことは好きな人、か。アヤカも恋する年頃になったのか。昔は『お父さんと結婚する』って言って、俺取り合ってサヤカと喧嘩してたつてのによー」

一瞬、サヤカって誰？ と思ったがその疑問を口にする前に、アヤカには二卵性の双子がいたという事実思い当たる。オーナーは五年くらい前に奥さんと離婚していたはずだから、サヤカという子は母親に引き取られたのだろう。

「最近ろくに店の手伝いをしてくれないと思ったたらそういうことだったのか。反抗期なのかと思っていたけど、昇に振られたのかー」

「いやいや、誰もそうだとはい言も」

「違うのか？」

先程までの「納得した」という優しい表情は消え、すぐに真剣な表情に切り替わる。

「……ノーコメントで」

真剣な顔は俺の返答と共に崩れ、娘を優しく見守る微笑ましそうな父親の表情に変わる。

「やっぱり振られたかー」

なんでこの人は大雑把そうな顔してるのにこういうところだけは聡いのかな。俺が悩んでも意味ないことだけだ。

「ま、たとえ振ったとしても友達として仲良くやってくれよ」

「一応、はい、と返事しておきます。偽善者ぶってるみたいで嫌ですけど」

「まーまー、そう言うなって。こんなことでアヤカと疎遠になりたくねえーだろ？」

「……そうですね」

「だろ」

オーナーは歯を見せてニイと笑った。俺もつい苦笑を浮かべてしまつ。

「無駄な世話かも知れませんが俺からひとつアドバイスいいですか？」

「なんだ？」

「本人の前では『こんなこと』とか軽く言わない方がいいですよ。中学生にしてみれば告白するのは一大イベントですから」

「若いねえ、中坊は」

「俺の話、真剣に聞いてます？」

「おう、聞いたとる、聞いたとる。しかとこの胸に刻み付けたよ」

台詞が胡散臭いのは流すべきなのだろう。世代の違いが生み出してしまった悲劇なんだ、きつと。

「それはそうと、一大イベントなんて使うお前もなんつーか、枯れてるなあ。それでも盛りのついた中坊かよ。せつかくコクられたんだから襲つぐらいしろよな」

「俺は恋愛に興味ないですから。それにオーナー」呆れ交じりの声で続ける。「あんたそれでもアヤカの父親ですか？ 実の娘を襲えつて。クラスメイトに何を吹き込んでるんですか」

「いいじゃねえーか、犯罪じゃないんだし」

「あんたの基準はそこですか？」

「そうそう。そうしていれば、オメエもめでたくチエリー卒業だったつてのによ」

「中学卒業する前にそんなもん卒業してどうするんですか」

「へえ。シズムは意外と硬派なんだな。学校サボる不良のくせして」

「硬派な不良のどこがおかしいんですか。硬派じゃない不良はただのヤンキーですよ。というか！ そもそも俺は遅刻が多いだけで不良じゃないし、名前は昇ですつて」

「おお、漏れのない突っ込み」

「あんたは何に感動してるんですかっ！」

「つてかさ、シズム、もうそろそろ時間なんじゃねえーの」

オーナー自慢の掛け時計を見ると、時刻は九時半。一時間目が終わるまであまり時間はない。

上手く勢いを折られてしまったような気もするが、実際これ以上この店で駄弁ついても迷惑だろうし、切り上げることにする。

「……そうですね。なら俺はそろそろ行きます」
席を立ててコートに袖を通す。

「おう、行ってこい」

オーナーは笑顔で俺を送り出してくれる。

「アヤカも元気付けてやってくれよ」

振り返って応える。

「嫌ですよ。自分がどれだけ残酷なこと言ってるか分かってます？
振った本人に慰めさせるって」

「おう、分かってるよ。それと、アヤカを振ったのはお前だって確定したな」

「……はめられた」

「元気出せ、昇。テンション上げていこーぜ」

オーナーは握った右手を俺に向けて出すと、親指をグツと上に突き立てるジェスチャーをしてくれる。

……本当、この人は。

「その言葉はアヤカに言ってあげて下さい。傷ついた娘を慰めるのは父親の仕事ですよ」

俺はそう言い残して、ドアをくぐって店の外へ出る。

冷たい風が温まった身体にしみる。

ああ、俺はいつまで経ってもオーナーには勝てないんだろうな。

ふとそう感じた。目的語は、まあ、各自で補完してくれ。父親ってすげえーよ。

喫茶店「FLOWER」から学校までは徒歩十分ほどの時間が掛かる。何の変哲もないその道のりをいつも通り堂々と闊歩する。人通りがまばらだといっても朝一で近所のスーパーに買い物に行くのであろう奥様方とすれ違うこともしばしば。

遅刻しているのに急ぐでもなく、こそこそ隠れるでもない俺の姿は、オーナーの言うとおり不良に見えるのだろう。

第一ボタンまでちゃんと締めているのに……。まあ、今はボタンがコートで隠れているから締めているかどうかなんて分かりやしないが。

指される後ろ指を気に留めることもない俺は、ちょうど一時間目の終了を告げるチャイムと共に校門をまたいだ。

校庭を横切って校舎内に入り、下駄箱で上履きに替える頃には各教室は騒がしくなってきた。

校舎内の部屋の配置は、一階が職員室や校長室、応接室などになっている。二階からは生徒が使う普通の教室になっている。階数が高くなるにつれて使う学年も上がるため、今年で三年の俺は四階まで上がらねばならない。

下駄箱スペースのすぐ横にある階段を利用して上がると、まず間違いない職員室に戻る教師とすれ違うことになるだろうが、それは仕方がない。この校舎には階段がひとつしかないのだ。

遅刻の多い生徒としてブラックリストに顔と名前が挙がっている俺を見ても、教師は顔をしかめるだけで、これといった注意をすることもない。注意をされても直す気がないのだから何も言わないのがお互いのためなのだ。利益を追求しているところに関してはその考え方に同意するが、道徳を重んじる学校教育における方針としては間違っている気がしないでもない。俺が発言しても説得力が皆無なので口にすることはないが。

そんなことを考えながらも二階、三階と上がっていき、四階に達する。

教室から漏れる休み時間の喧騒を聞きながら自分の教室まで移動する。受験を間近に控えているというのにこころも騒々しいのはどうなのだろう。夏場のセミの鳴き声レベルには耳障りだ。

後ろの扉から教室に入って、窓際後ろから二番目の席に着く。休み時間なのでそれほど目立つわけでもなく、不良のレッテルを貼られている俺に好んで挨拶をしようとする奴も少ない。声をかけてくる物好きはそうそういないのだ。

一言も言葉を発しないまま、ぼんやりと窓の外を眺める。

……学校は嫌いだ、本当に。

そのまま二時間目の準備をするでもなく、学校の敷地に面した道路を横切っていく自動車を目で追っていたのだが。

「うーっす、シズム。今日も沈んでるねえ」

物好きはそうそういないが、「それゆえ俺の周りには物好きが集まるというのもまた真理」

俺の真後ろの席の住人、勝海健斗かつみけんとがその代表例である。

「来て早々に語り出しちゃってるし。引いていい？」

トイレにでも行っていたのであろう数少ない友人に振り返り、とりあえず罵倒しておく。

「地の果てまで引っ込め、カツがつ！」

「『カスがつ！』って言うノリで僕の名前呼ぶのやめてくれませんかねえ！？」

「いいだろ一文字しか変わらないんだし」

「二文字中の一文字は『し』か」とは言いません」

「ケチケチすんなって、喫茶のオーナーみたいにサービス精神大事にしるって」

「色々突っ込みたいけど、オーナーはケチだと思う、とだけ言っておく」

「あの人、常連には気前いいよ。今日はカプチャーノ奢ってくれたし」

「たまにしか行かない僕はお友達価格で二十パーセントアップだけどね!？」

「いいじゃねえーか、そのくらい。オーナーなりの冗談だろ。あつ、それとオーナーから伝言ね」

俺はカツの前に握った右手を突き出すと、親指をグツと立てる。

そして満面の笑みと共に指を下に向ける。

「消えろっ。カスがっ!」

「それ伝言じゃないよねえ! あんたの正直な気持ちでしょ!」

俺は神妙な表情をつくり、目を伏せる。ついでに右手でカツの肩をポンポンと叩いてやる。

「いいことあるさ。お前はカスでも神様は平等なんだ。心配するな」

「あんたの頭が心配だよ!」

「『一寸のカスにも五分の魂』……よく言ったものだ」

「言わねえーよ。つか僕そこまで小さくないし、五分の魂とかどんだけちつぽけな存在だって話だよ」

「『一寸のカスでは三つの突っ込み』……よく」

「言わねえーよ」

「むう。ボケごと潰しにきたか。こいつ戦いの中で成長してやがる……」

「『どこの少年漫画だよ!?!』」

「ま、それでこそ俺の数少ない友人の一人だろ」

「そこはかとなく馬鹿にされている気がするんだけど……」

「気にするな。それより一時間目のノート貸してくれ。次の放課には返すから」

「ほいよ」

カツは机の上に出しっぱなしになっていた数学のノートを渡してくれる。

「サンキュ」

「つたく、シズムは真面目なんだか不良なんだか」

「俺は遅刻が多い優等生だっつーの。あと死ね」

こいつにシズムと呼ばれると何故だかイラツとする。

「ボソツと呟かれると怖いんだけど……」

カツの言葉は無視して早速ノートを写す作業に取り掛かる。

絶対に口に出すことはないが、俺はカツに意外と感謝している。

遅刻ばかりの俺が授業についていけないのはカツのおかげだし、つまらない学校を休むことがないのも、まあ半分くらいは。

二時間目の終了を告げるチャイムが鳴り、起立、礼を終えると、教室内はまた一気に喧騒を取り戻す。

「はい、これ。ありがとな」

俺は着席せずに後ろを振り返ると、先程の授業中に写し終えた数学のノートをカツに返す。

「どういたしまして」

カツはノートを受け取ると、机の上に出してある教科書類と一緒に机の中突っ込む。

「それにしてもシズム」

「死ねっ」

笑顔で言つてやる。やっぱりなんかムカつく。

「酷っ。てか怖いんですけど、その笑顔が」

「んで用件を言え、用件を」

「いやあんたが邪魔したんでしょうが。……色々訊きたいことあるんだけど、昇、最近なんかあったの？」

「どうして？」

「いや、今週はやけに僕への風当たりが強くなって思ったんだけど、気のせい？」

変わらないように努めてるけど、やっぱりいつもと違うのかな、俺。

だがまあ、アヤカのことをカツにまで話す必要はないだろう。

「ノーコメントだ。お前に話すようなことじゃない」

「そーすか」

それほど興味のある話題でもなかったのだろう。カツはやる気のない返事をして鞆から体操着を取り出した。

「あれ？ 次つて体育だったか」

教室内を見渡すと、男子は雑談をしながらそれぞれ着替え始めて

いて、女子は残っていない。女子更衣室が用意されているのだ。男子更衣室がないのは、仕方ない。その代わりにわざわざ移動する必要があるという特権があるので文句はないが。

もつとも俺は。

「シズムは今日もサボりなの？」

「死ぬ。それと俺は今日も体操着を忘れたただけだ。俺の鞆には体操着を入れるスペースなんて用意されてねえーんだよ」

受験勉強の息抜きのために、体育の準備運動以外が自由参加の形式になったときにそんなスペースは消滅している。

「朝食の食パンを入れるスペースはあるのに？」

「飯は必要だろ？」

「あんた考え方間違ってますからね」

「いいだろ。思想の自由は保障されている」

「いやいや」

ため息を吐きながら着替えるカツを横目に俺は教室の出口に歩く。

「見学くらいすればいいのに」

振り返らずに返事する。

「単位制じゃねえーんだから、どこにしようと思わねえーだろ」

屋上で時間潰すほうが俺には合ってるんだよ。グラウンドの隅でサッカー観戦するより、よっぽど。

言い残して制服姿のまま教室を出る。向かう先は屋上。

早めに着替えを終えた男子生徒たちはゆったりと廊下を歩く俺を追い越して、階段を下っていく。体育の種目は確かサッカーだったはずだからグラウンドに向かうのだろう。

階段にたどり着くと、一般生徒の流れから外れて段を上っていく。もしかすると俺は相当ひねくれているのではないのだろうか。そんな思考が頭を過ぎる。

だがまあ、こんな自己分析に意味などないだろう。結果を吟味して自身をより良い人間に変えようと努力をするつもりはないのだ。結果がないのならば、どれほどの過程を経たとしてもその工程はまさしく無意味。

俺は何を考えているのだろう。

頭を振って意識を外界に向けると、くぐり慣れたドアはすでに目の前にあった。ノブを握りドアを開け放つ。風が脇を吹き抜けていく。耳が少し痛い。

曇り空の下に踏み出し、後ろ手にドアを閉める。

風はあまり強くないが、上空を覆う雲のために気温もそれほど高くない。そのためか、コートなしで外に出るのはやはり少し寒い。今日は早めに切り上げるべきかも知れない。

屋上のちょうど中心部には四つの給水塔が正方形を描くように設置されている。俺の定位置はその裏、階段から続いていたドアの死角になる場所になっている。理由は単純で、たとえ誰かが来てもサボっていることがバレにくいから。

特に何の感慨もなく、いつもと同じコースを辿って給水塔を回り込むと 先客がいた。両膝を抱えて座って無表情で前方を眺めていた彼女は、足音で俺に気づいたのかゆっくりと視線をこちらに寄せた。

「おはよう、昇くん」

微笑を湛えた彼女は小さくそう言って、視線を前方に戻す。

『寂しそう』

そんな感想が俺の心のどこかから湧いてくる。

「よ、よう。アヤカ」

アヤカには見えていないだろうが、精一杯浮かべた俺の笑顔はきつとぎこちない。

「隣、いいか？」

「……うん」

首をコクンと縦に振る。

反応を確認すると、俺は一人分くらいのスペースを空けてアヤカの隣に座った。

これくらいが、今の俺とアヤカの適切な距離だ。一週間前はこの半分だったはずなのに。心でいくら寂しそうだと思っていたとしても、俺にはどうすることもできない。自分からその権利を放棄したのだから。

「なんか昇くと話すのってすごく久しぶりな気がする」

「そう、だな」

「まだ一週間も経ってないのにね」

「……ああ」

俺には相槌を打つことしかできなかった。どうという言葉をかければいいのか。

「今日は体操服忘れちゃったから、昇くんみたいにサボってみたの。アヤカは前を向いたまま寂しそうに微笑する。

だが俺には何もしてやれない。

「俺が屋上でサボるってよく知ってたな」

「だって、いつも見てたから」

「……」

「いつだって私は昇くんのこと、見てたから」

「……そうか」

「……」

「……………」
会話が続かない。ちょっと前までは話題に困ることなんてなかったのに、どうしてか何も見つからない。どんな話題でもこの空間では場違いになってしまふような気がする。

俺たちは無言のままフェンスの向こうの灰色を眺めていた。

俺たちの間には厚い氷の壁ができてしまったんだと思う。氷を溶かす太陽は地平線に沈んだままで顔を出してくれない。温度は一方的に下がるだけで解決の糸口は見つからない。

紅い月が墮ちないのと同じように、太陽だって俺が願ったところですぐに出てきてくれるわけじゃない。俺にはどうすることもできないんだ。時間に解決を委託することが精一杯。いくら俺が足掻いて壁を削ったところで、負う傷に見合う対価なんて得られるはずがない。凍える身体から無意味に体力を減らすのはただの自殺行為だ。時間に頼るだけ。

そして氷月彩華こいづき あやかの父親であるオーナーに頼るだけ。

俺には月を墮とすことも、アヤ力を慰めることもできやしない。

俺はなんの力もないただの臆病者だから。

「……………ねえ。昇くん」

「どうかしたか？」

「ごめんね、なんか。私、邪魔だよね」

「いや……………」

今の俺にはしっかりとした否定の返事をすることはできなかった。

「でも、あんまり長いことここにいと風邪引くぞ」

「そうだね」

「そしたらオーナーがお前のことを心配する」

俺も心配するし、なんて言葉を言う資格も放棄したんだ。

「……………そうだね」

アヤ力はまた寂しそうに微笑する。

やめてくれよ。なんでお前は泣きそくな顔して笑っているんだよ。

校庭からは大声で指示を飛ばす生徒の声や、ホイッスルの音が聞こえてくる。この場所での会話よりも遠くのグラウンドからの音のほうがよっぽどリアルだった。ここでの出来事はどこか現実味が無い。

俺たちの関係はこんなきこちないものじゃなかったはずだ。

どこで間違っただろう？ いつから歯車は狂い始めていたんだろう？ ……どうして？ どうしてこんなときまで、あの憎たらしい母親の顔が浮かんできやがる？

結果がゼロなら過程もゼロ以下だ。プラスにならない思考は早急に処分すべきだ。

……会話を、なにか現実味のある会話をしなければ。

「オーナー、心配してたぞ」

浮かんだのは喫茶店のオーナーだった。

「うん」

「あんまり心配せんなよ。あんないい親父さんを」

「うん」

「……あと、ごめん。告白のこと、オーナーにバレた」

俺の言葉でアヤカの肩が少しだけ震えた。そして前方に向けていた視線を俯かせ、膝に額をくつつける。

「仕方ないよ。昇くん、昔から自分に正直だったから」

なあ。なんでお前はまたそうやって寂しそうに笑っているんだよ。それでしょ？

アヤカが顔をこちらに向ける。眼が合った。

「だって、今だってほら、泣きそうな顔してるし」

「え？」

嘘だろ？ 俺が？

「どうせ私をどうやって慰めればいいのか悩んでるんでしょ？ 分かるよ」

その時だった。アヤカの頬を涙が伝う。

すぐに俺から顔を背けると、制服の袖で拭う。

オーナーには無理だつて言ったけど、泣いているお前を放っておけるわけがないだろ。

「やめてよ、慰めるのとか。優しくされちゃったら昇くんのこと諦められないよ。まだ可能性あるのかもつて。振るんだつたらちゃん嫌いになれるように突き放してよ。悪役を演じきつてよ」

分かつてるよ、そんなこと。俺が中途半端だつてことくらい。

「……お前のほうこそ泣いてるじゃねえーかよ」

その言葉はひどく場違いだった。

「……」

「……」

けれど会話を終わらせられるのなら、それで良かった。こんな話をアヤカとしていたくない……。

俺は制服の袖で湛えた涙を拭う。これ以上話していたら涙が溢れてしまいそうだ。

鼻をすする音が聞こえてくる。それは俺のものなのか、アヤカのものなのか。

それから会話は一切なく、三時間目終了を告げるチャイムが鳴った。

アヤカは無言で立ち上がり、俺に背を向けて校舎内へ歩き出した。見送ることはしない。ゴンとドアが閉まる音がした。

「俺は結局、何がしたかつたんだ？」

呟いて、空を見上げる。

母親さんよお、見てるか？ 俺の無様な姿をよ。あんたが超能力者だと豪語した人間は今、こんなにも惨めなんだぜ？

頬を液体が伝う。きつと雨が降り始めたんだ。しよっぱい雨が。チャイムが鳴る。四時間目が始まってしまった。……またカツにノート見せてもらわないとな。

視線の先の灰色は黒く変わってきている。

雨が降り出した、冷たい雨が。

眼に雨粒が入り、滲む。どうしてこんなにも俺は苦しんでいるんだらう？

チャイムが鳴る。四時間目が終わった。

結局、俺はずぶ濡れになりながらも、屋上から立ち去ることはなかった。アヤカに風邪を引かないように気をつけると言っておきながら、これでは俺のほうで風邪を引くことになりそうだ。

学生服の中まで水が浸入してきている。下着は肌に張り付いて不快だし、制服をクリーニンングに出さないといけない。

立ち上がることにすら億劫だった。もうこのままここで寝てしまいたい。けれどそんなことをしたら確実に身体が壊れてしまう。

今日はもう家に帰ろう。そう思った。

今から給食を食べて授業を受ける気にはとてもではないがならない。それにアヤカと同じ空間を共有することも憚られた。氷の壁が溶けるまでは一緒にいるべきではない。

重い四肢を動かして立ち上がると、教室に向かう。手足が重いのは服が水を吸ったためだけではない。

来たときよりも重くなったドアを開け、段数の増えた気がする階段を下りる。長くなった廊下を歩いて、後ろのドアから給食の時間が始まっている教室に入る。

突然の侵入者にクラス中の好奇の視線が向けられるが、俺が見回すと全員がすぐに逸らした。ただ一人を除いて。

「おかえりー。もう飯の時間だぜ？」

カツは相変わらずの調子で、俺に手まで振っている。

「昇はサボりすぎ。どこ行ってたんだよ」

屋上、と正直に答えるのは何故だか少し気が引けた。

「雨に濡れてきた」

「いや、見れば分かるけど」

俺が身体中ずぶ濡れなのは見るだけでももちろん明らか。前髪や学ランの袖から水滴がぼたぼた垂れている。一箇所に残まっていたら

水溜りを作ってしまったいそうだ。

「ま、いいや。それでさあ、今このクラスでちょっとした噂が流行ってるんだけどさあ」

カツがその言葉を発した途端、クラス中の動きが一瞬だけ止まったような気がした。

「お前がアヤちゃんと付き合ってるって本当？」

アヤちゃん、カツがアヤカを呼ぶときに使っている名前だ。

「……………」

「怖っ。そんなに睨むなよ」

「アヤカは？」

「いないよ。三時間目も四時間目もいなかった。だから逢引なんじゃないかって。お前とアヤちゃん、わりと良い雰囲気だったし」

「……………そうかよ」

事實はまったく逆だけだな。

席にかけてある鞆を取ろうとして、止める。傘も持っていないのに持っていったら中身が濡れてしまう。

「カツ、俺が明日休むようだったら、鞆の中のパン処分しといてくれ」

「なんで？」

「たぶん風邪引いた。鞆持って帰るの面倒」

「そーすか。……………で、アヤちゃんと喧嘩でもしたの？」

「……………ノーコメント」

「したんだ、やっぱり」

俺はカツの言葉に肯定も否定もせず、ドアに歩き出す。

「ちよつと、昇。飯は食わないのか」

「食欲ねえーんだ」

言って教室を出る。

学校を出て、まず家に向かって歩き出したことだけは覚えている。そこから後はどこをどう歩いたのかあまり記憶にない。

傘は持ってきていなかった。だから雨に打たれて歩いていた。

髪の毛も制服もびしょ濡れだった。髪から垂れてきた雨と前から俺に向かって降ってくる雨粒が目に入り込んで視界が霞み、前がよく見えない。

頭は朦朧としていて、思考がヒートしている。冷たい雨が頭を冷やすけれど、それで脳が冷えることはなく逆効果だった。

身体は冷やされてどんどん弱っていく。

早く家に帰らなければ、と思うが足はボロアパートに向くことはない。そもそも自分がどこにいるかすらも分かっていないのだから意識は消えかけで、思考は半分以上がダウンしている。視界の端には常に黒と白の光点が点滅している。頭痛と吐き気の苦しみでなんとか意識を保っているような状況。

パシャパシャと地面の水溜りを蹴る音が聞こえる。だんだんこちらに近づいてくる。

人影が俺を追い越して走っていく。肩まで伸ばした髪、紺色のブレザー、短めのスカート。見慣れた学校の制服だった。

人影は道の先五十メートルほどで俺に振り返るとニヤリと笑う。

……アヤカ？

気持ち悪い。吐き気がする。

明らかに幻覚だった。この距離で雨が降って視界が悪い中、人の表情なんて見えるはずがない。

どこまでが現実でどこからが幻覚なんだろう？

ああ、ダメだ。こんなこと考えている場合じゃない。今にも意識が飛びそうだ。つらい辛い辛いつらいつらいつらいつらい辛いつらいつらいつらいつらいつらい！！

なんで俺はこんなところで歩いてる？ もう家に着いていてもおかしくない時間だ。でも足は意思とは無関係に動いている。

そういえばアヤカは？

早退したって確かカツが言ってたよな。……さっきの人影、アヤカじゃなかったか？

どうしてアヤカがこんな所にいる。そもそもここはどこだ。家は？ アヤカは家に帰ったのか。違う、でもこっちは喫茶店じゃないはずだ。頭が朦朧として上手く働いてくれない。

俺は何をしたいんだ？

家はどっちだ。帰らないと。でも、アヤカはどこに行った。行方不明なのか。あれ？ でもどうして。……とにかく探さないと。

ああ、ダメだ。どっちに行ったかもう覚えていない。なら警察。でも警察署ってどこだ。

頭がガンガンする。薄暗い。寒い。まだ昼なのに。俺はなんでこんなところにいる。何がしたいんだ。

とにかくアヤカを見つけないと。でも、俺は見つけてどうするんだ。どうやって声をかける。見つけても何もできない役立たずじゃないか。

やっぱりオーナーに相談した方が早いのかな。くそっ。喫茶店どこだよ。

当てなんてなく、ただ歩き歩き歩き歩き。雨が痛い。倒れそう。気持ち悪っ。

それでも足は止まらない。もう下半身は冷たすぎて感覚が麻痺している。歩いて歩いて歩いて歩いて歩いて歩いて。

そしてやっと。

俺は見知った喫茶店のドアの前にたどり着いた。まだ営業時間、しかも昼間のかきいれ時のはずなのに「CLOSED」の札がかけられている。

頭は朦朧としていて、なにが起こっているのかよく分からない。脳を中心に石を突っ込まれて無理矢理シェイクしているみたいに痛

む。もう雨音もよく聞こえない。

「オーナー、あんた……真昼間になんでサボってんすか……」
ドアを押し開けて、カランカランと来客を知らせる鈴がなる。耳の奥で反響。店内はカーテンが締め切られ、明かりも消されていて薄暗い。

コーヒー豆の独特な臭いがどこか新鮮だった。身体は泥臭い。とにかくまずはオーナーを呼ばないと。コーヒーを一杯もらおう。冷やされた身体を温めないといけない。いや、でもそれより先にアヤカがいなくなったことを説明しないと。今日はバイトを休むことも言っておかないと。

全身が冷やされているはずなのに身体は熱い。汗と雨が混じっている。蒸発してさらに体温を奪っていく。

「オーナー」

声を出して、店の奥に呼びかける。

喫茶店「FLOWER」は自宅の一部を店舗として使っているの
で、奥にオーナーはいるはずだ。

「オーナー、いないんですか」

ふらふらとした足取りでカウンター席のイスに腰掛ける。

寒かった。熱かった。脳みそがとろけているような気がする。

「オーナー！ ツ！？」

大声が頭に響く。

「痛ったた、オーナー」

音量を元に戻す。

声に反応してくれたのだろう、奥でドタドタという物音がする。

そして呆れ顔でオーナーが姿を現した。

「……なにやっつてんだ昇。学校はどうした？ とうか今日はもう店じまいだ。……って、お前が入ってきてるってことは鍵閉め忘れてたのか」

言いながら壁を探ると、電気をつけてくれる。

「おいおい。お前ずぶ濡れじゃねえーか」

「……そんなことはどうでもいいんです、いやどうでもよくなって、コーヒーは欲しいんですけど。それよりもアヤカ。アヤカを探さないで。いなくなっただんです！ ツ！？」

勢いで出してしまった大声がまた頭に響く。

「大丈夫か？」

「俺はいいから早くアヤカを」

「いるよ」

オーナーはコーヒーの準備に取りかかりながらあっさりとした声で答えた。言われていることの意味が理解できない……。

「今、部屋に閉じこもってる」

「え？」

部屋？ どうしてアヤカは家にいる？ ……ダメだ。頭が痛くて情報を整理できない。何が間違っているんだ？

あつ、でも、アヤカが無事なら何も問題はないのか……。

「お前に振られて傷心のアヤカを慰めようとせっかく店を閉めたのに、余分な仕事を増やしやがって」

オーナーの言葉は耳から脳に伝わってくれない。

でも、とにかく安堵の気持ち広がっていく。アヤカは家にいる。全部俺の勘違いだったんだ。アヤカが自棄になっていなくなるなんて、そんなことはなかったんだ。

あ、ヤバッ。安心したら意識が。

「すみませんオーナー、俺ちよつと無理っばい……」

「はあ？」

オーナーが振り返る。そしてこちらを向いたオーナーが傾いている。

身体に力入らねえー。このままだと頭打つかも。もうすでに痛いっつのに。

「お、おい。昇！？」

オーナーの声が遠い。音が小さくて相変わらず何言ってるか理解不能だ。

ドツと大きな音。頭に激痛が走り、俺の意識はプツリと途切れた。

目を開けると、真っ白な天井と蛍光灯の光が視界に入ってきた。顔を傾けると、今度はテレビとローテーブル。床はフローリングになっっている。

ここまで見て、やっと世界が九十度回転していることに気づいた。どこかに寝かされているみたいだ。

背中感触はやわらかくて、ふかふかだ。少しだけ身体を起こして確認してみると、三人がけのソファアだった。

と、その時。

額に乗せられていた濡れタオルがずれて、床に落下した。

……タオル？ 何故こんなものが？

そもそも俺はどうしてこんなところで寝ている？

自宅であるアパートの部屋はすべて和室だったはずだ。それに対してここは完全なる洋室だ。

記憶を探ってみるが、ずぶ濡れになりながらも傘を差さずに学校を出たところまでは覚えていたが、それ以降はもやもやしてよく思い出せない。

とりあえずは落ちてしまったタオルを拾っておくかと思い、手を伸ばす。

「おっ、シズムが起きた」

聞き覚えのある声。床に落ちたタオルに手をついた状態で顔を上げると、私服姿のオーナーが手に濡れタオルを持っていた。

どうでもいいけれど、この人の私服姿を目にするのはすごく久しぶりかも知れない。この大雑把そうな人でも仕事の時はちゃんとした服装をするのだ。公私混同はしない……とは言いきれないが、一応はじめはつける人なのだ。

……思考が脱線したが、何故オーナーがいる？

「頭とか痛くないか？」

「いや、大丈夫ですけど。なんで……」

そんなこと訊くんですか？

そう言おうとして、頭を中心に電気が走ったような痛みがした。思わず顔をしかめる。

オーナーはそんな俺の表情を確認すると苦い顔をする。

「やっぱまだ痛いか。お前派手に倒れたからな」

あつ、そうか。そういえば俺、倒れたんだった。

言葉がきつかけとなり、やっとすべてを思い出した。

「ここ、アヤカの家、なんだ……」

「そこはせめて『オーナーの家』って言ってほしいんだがなあ。ま

あいい。思い出したか？」

「……はい。迷惑掛けてしまつて、すみません」

「いいよ、病人は大人しく寝てろ」

オーナーは俺が拾ったタオルを奪い取ると、無理矢理寝かせ、頭の上に新しい濡れタオルを押し付けてくる。

「痛いですつて、やめてくださいよ」

「給料一か月分無しな」

咄嗟に何を言われたか分からなかった。

「明日の夜まで面倒見てやる。それまでに意地でも治せ」

「……どういうことですか？」

オーナーは苦笑した後、ため息をついて話し出す。

「本当なら、お前がぶつ倒れた後に親御さんに電話して迎えに来てもらうのがベストなんだが、生憎とお前の親父さんは現在単身赴任中だろ？ 一人暮らしのくせに保護者の一人も近くに住んでない、と。本人は熱がある上に頭打って気絶してるし？ 俺としてもそんな病人をタクシー呼びつけてアパートに送り返すなんて真似はさすがに心が痛むわけよ？」

「でもそれなら病院」

「お前ん家、金ないんだろ？ 入院なんてことになったら金掛かるぞ」

「……………」

確かにそうだ。まだわずかだけれど借金があるし、貯蓄もあまりない。風邪で入院する程度の費用で困ることはないが、掛からないに越したことはない。

「そこで俺からの提案だ。明日の夕方までは俺が面倒見てやる。その代わり一ヶ月間ただ働きしろってことだ。こっちも店を一日臨時休業しなくちゃならんからな。妥当な対価だろ。いい話だと思うんだが、病人さん」

オーナーがニヤリと笑う。

「俺はありがたいですけど。いいんですか、そんなに簡単に店を休みにしちゃって」

「ま、そこは気にするな。ウチにも一人、いるからな」

オーナーはそこで、自分の胸を指で叩いた。

「こっちの治療が必要な嬢ちゃんが、さあ。部屋から出てきてくれねえーんだよ」

「……………すみません」

「そう沈んだ顔をするなつての。『昇は悪くない』なんて慰めるつもりはねえーが、まずは自分の身体を治すことだけ考えてる」

「はい……………」

「この調子なら明日は二人とも学校休むことになりそーだしな。ちようど良かったよ、俺も仕事休む理由ができて。傷心の娘を慰めるって理由じゃちよつとアレだしな」

「……………オーナーも世間体って気にするんですね」

「バカヤロウ。こっちは商売なんだからそーいうもんは人一倍気にしなきゃならんだろ」

「なるほど」

「ま、なんにしるアヤカがこのままってのは困るからな。恋愛なんかの原因でシズミみたいな学校をサボる不良になってもらうわけはいかないしな」

「だから『恋愛なんか』って……………」

「分かってるよ、アヤカの前では言わねえって」

「ならいいですけど」

「……『シズム』と『不良』に突っ込みがないって、お前相当具合が悪いみたいだな」

「……………迷惑掛けます」

「いいって。俺は今から飯作ってくるから。お前も粥くらいは食べよ？」

「……………頑張ります」

「それと、長話に付き合わせて悪かったな。配慮が足りなかった」

オーナーはバツが悪そうにそう言つと、返事も聞かずに部屋のドアを開けて出て行ってしまった。

俺もさっさと治さないと。いつまでも迷惑を掛けるわけにはいかない。

目を閉じる。

特筆することもなく、約一日が経った。現時刻はだいたい午後三時くらいだろう。

『面倒は見てやるが、ベッドまで貸してやる気はないぞ』

とはオーナーの言葉。ソファアにずっと寝かされたまま、夕食・朝食・昼食に粥と薬を半ば無理矢理に胃に突っ込まれ、食事と水を飲むとき以外は起き上がることにすら許可されなかった。

この上なく退屈な時間を過ごすことになったが、そのおかげでもう身体にダルさは残っていない。おそらく、熱も引いている。唯一残っているとすれば、頭にできた小さなたんこぶくらいだろう。

現在オーナーは外出中。家に常備してある風邪薬が切れてしまったらしく、夕食の買い物ついでに近所のドラッグストアまで出かけている。

アヤカの件がどうなったのかは知らないが、物音は聞こえないのでまだ部屋に閉じこもっているのかも知れない。

「暇だ……」

テレビを点けてバラエティ番組でも見ようかとも思わないわけではないが、俺はこれでも居候の病人の身。たとえ『見る』と言われたいとしても遠慮してしまうのは日本人の性^{さが}か。

仕方なく、ソファアの背後にある窓から空を眺める。未確認だが、喫茶店「FLOWER」が左右と後ろを住宅に囲まれているという立地を考えると、空が見えるこの窓は南向きだろう。立って見下ろせば公園や桜を見ることができはずだ。

だがまあ、ソファアから立つことを許可されていない俺からでは雨が止んだ空しか見ることができない。ところどころにある雲の切れ目から青空を覗くこともできるが、ほとんど一面が灰色に包まれているような状態だ。今日も太陽は拝めそうにない。

いい加減に代わり映えのない空を見ているのに飽きてきたので、

もう一眠りするとしよう。身体の調子が良くなってきたことをオーナーには昼のときに伝えてあるので、夕食はまともな食事をご馳走してくれるらしいし。

窓の外を見ていた視線を元に戻し、目を閉じた時にちょうど部屋のドアが開く音がした。

「あれ？ オーナーもう帰ってきたんですか？」

視線をそちらに向けると

「昇くん……」

アヤカがいた。ドアの影に隠れるようにこちらを覗いている。

「……………」

咄嗟にはどう声をかけるべきか思いつかず、沈黙してしまう。

「よ、よう、アヤカ」

寝転がったまま、片手だけを挙げて挨拶。「……………元気か？」

「元気、だよ。今日学校休んじやったけど」

そう言っただけで恥ずかしそうに笑うアヤカの目元は少し赤い。

「昇くんは？」

「え、俺は……………」

どう答えようか、迷う。一応まだ風邪は治っていないわけだから元気ではないと言っべきか、治りかけなのだから余計な心配をかけるために元気がだと言っべきか。

「一応、元気。だいぶ楽になってきているから」

結局そう答えることにした。どうせ社交辞令で訊いたようなものだ。『元気』でなくても適当に理由をつけて『元気』と答えておいて間違いはないだろう。

「良かった……………」

適当な返事だったはずだが、アヤカは心底安堵したような表情を浮かべる。

『罪悪感』という物質を胸に注射されたような気分になった。チクチクして胸をかきむしりたくなる。

お前は俺を嫌いになるんじゃないかなかったのか？　なんでそんな

顔見せるんだよ。

「……そんなところに立ってないでこつち来たらどうだ？」

アヤカとの問題を長引かせるのは精神衛生上よろしくない。俺の心は決まっただけで変わることはないのだから、早めに決着をつけてしまいたい。

「でも、昇くん、風邪……」

「アヤカと話したいことがあるんだ」

弱々しい反論を強引に一蹴する。どちらにしろ俺は問題解決まで、こいつの前では悪役を演じなければならぬんだ。

起き上がって、ソファーに空きを作る。急に起き上がったことで重力の感覚に慣れていない頭がクラクラしたが、そんなものは無視だ。空いた席をポンポン叩く。

「座れよ」

アヤカはドアに半分隠れたまま動いてくれない。顔が映し出す表情は怯えたもの変わっている。

注射された『罪悪感』が身体の中で急激に増殖している気がした。全身が気持ち悪い。今すぐにでもかきむしりたい。

なんなんだよ、これは。悪役を演じろって言ったのはお前だろ？　なんでそんな悲しそうなんだよ。

「座ってくれよ、頼むから……」

俺にはアヤカに厳しく当たり続けるのは無理だった。

「うん……」

小さく返事をしたアヤカは俯きながら俺のほうを見ないようにならなくて歩いて、隣にちょこんと腰掛けた。

「あのさ……」

そこまで言って、口ごもる。言葉が喉から出てこようとはしない。

「……」

「……」

アヤカも下を見て、両手をギュッと握っているだけで話そうとはしない。当たり前だが、俺が話し出さなければ何も始まらない。

氷の壁を溶かす太陽はいまだに姿を見せない。現実と同じように、きつと曇り空が続いているのだ。

一日、ずっと考えていた。いや、考えてしまった。動くことができず、なにかに夢中になることもできなかった俺の頭の片隅にはいつもアヤカがいた。思考は堂々巡りを繰り返し、たどり着く結論はいつも告白を断ったときと同じ。

変わりたくない。

アヤカと付き合うこと自体は嫌ではない。けれど付き合うことによって、今までの関係で築いてきた『何か』が壊れてしまうような気がした。自分が変わってしまうことが怖かった。アヤカとの関係を一度壊してでも、『静見昇』という人間の一部を定義する『何か』の存在を守ろうとした。

結局はなにひとつ守れていないのかも知れない。『何か』は、アヤカとの関係というラインの切断によって、苦しんでいる。罪悪感という形での痛みの現れ。

だから俺は決めた。
はつきりさせる。

俺たちの関係は友達止まりだ。それ以上には決してなれない。俺は絶対に前に歩き出すことはない。

そんな後ろ向きな決意。

俺は変わらない。変わりたくない。

だから歪んでしまった関係を素人の力で無理矢理にでも修正する。もつと歪んでしまうかも知れない。だが、そんなのも知るか。自分が決めたことだ。首を絞めることになったとしても責任くらい自分で背負ってやる。上等だ。

もともとこの行動は氷の壁に殴りかかりに行くようなものだ。立ち止まって凍えているだけでは、元に戻るはずと先だ。それまでに餓死しちまう。なら、歪に進んだ関係を修復するには後ろ向きに歩き出すしかないだろ。

「……俺は、お前とは友達のままでもいい」

「……………」
唇を噛んで、アヤカの表情から目を背ける。

「恋人にはなれない」

「……………」

「俺、アヤカのこと、友達としては『好き』だ。でもそれは異性に
対する『好き』じゃない。『Like』止まりなんだ。どうやって
も『Love』にはならない」

「それでも私は……………」

「俺はお前を受け入れることはできない。だからごめん、無理なん
だ。できれば前みたいな関係に戻りたい。告白はなかったことにし
たい」

「……………」

「前みたいに戻れないなら、お前が諦められるように縁を切ろう。
俺はもうお前に話しかけたりしないし、二度とこの店にも来ない。
オーナーには悪いけど、バイトも辞めさせてもらう。店の前の公園
で猫に餌やることもしない。極力お前とはかかわらずに生活する。

……………選んでくれ」

卑怯な賭けだった。

「選べないよ……………昇くんずるいよ」

アヤカの声は震えていた。

絶交か修復か。告白する決意をやったの思いでしたのであろうア
ヤカにとっては、選びようのない選択。限りなく理不尽だった。

「俺は悪役演じなきゃいけないから……………」

言い訳だった。卑怯で理不尽な賭けの言い訳。だが、俺の気持ち
をこれ以上口にするのはもっと卑怯に思えた。それではただの誘導
尋問だ。

賭けは俺にとって、限りなくハイリスクなものだ。人間関係を修
復するために、『生活』という『静見昇』を構成する重要な要素を
差し出したのだ。

でも、だからこそ卑怯なのだ。賭けの勝敗を決定するのは、無慈

悲な確率に左右されるカジノの機械ではなく、感情を持った人間なのだ。アヤカは俺と、そして自分自身の負うリスクを知っているからこそ、絶交の選択はできない。

「……戻りたい」

アヤカが鼻をすする。見ると、目には涙を湛えていた。

「そんな悲しそうな声してる悪役なんてどこにいるのよ……」

「……ここにいる、だろ」

わざと明るい調子で言おうとして失敗した。声が震えた。

「そんなつらそうな昇くん見てられないよ。嫌いになれるわけないでしょ」

「おいおい、それは理不尽」

「私は！」

アヤカがいきなり立ち上がって叫んだ。「昇くんが好きなの！」

「アヤカ、近所に聞こえるって。ポリユーム下げろ」

「知らないよ、聞こえたっていいもん！」

涙を流しながら怒って俺を睨む。

その時、階下の玄関で「ただいまー、帰ったぞー」というオーナーの気の抜けた声がした。しかし、興奮しているアヤカはそれすら聞こえていない様子。

「昇くんのごとがどうしようもなく好きなんだもん。嫌いになれないよ。諦められないよ！ たとえ昇くんが嫌だって言っても一緒にいたいんだもん！」

「おい、オーナー帰ってきたって」

「知らないよ、お父さんがどうしたって言うの。私は昇くんのこと絶対に諦められないからね！ 絶対に諦めないからね！」

言っただけにアヤカは走って部屋を出て行った。ダダダダと廊下を走る音と、「うおっ、危ねえ」というオーナーの声。そして遠くでバンツ！ とドアが閉まる音がした。部屋にまた閉じこもるつもりだろうか。

俺が呆然と座ったままでいると、オーナーが買い物袋を持ったま

ま恐る恐る部屋に入ってきた。

「昇。お前、なにやったんだ。怒られてたのか、告白されてたのかもよく分からんし」

「……………さあ？ どうなんでしょう」

正直、まったく分からない。

「俺はいつになっても乙女心って分かりそうにないんだが……………」とオーナー。

「同感です……………」

男二人、ただただ顔を見合わせて、傷心の娘から憤激の娘に変わってしまったアヤカにどんな対応をするのかを考えるのだった。

「オーナー、夕食ありがとうございます。それとお世話になりました」

きちんとした一礼をする。

夕食を食べ終えた俺は喫茶店「FLOWER」の裏手にある氷月家の玄関にいる。

「そんなにかしこまるなって。風邪も治ったみたいだし、良かったじゃねえーか」

「本当、ありがとうございます」

さすがに二度もきちんとした礼をするのは野暮ったいような気がしたので今度は会釈程度にしておく。

「ま、気にするな。それと金の話だが……」

「一ヶ月タダ働きですよ。分かってますって」

オーナーは頬を掻きながら俺の言葉を否定する。

「いや、その話はもういいよ。お前にはウチの傷心の嬢ちゃん慰めてもらったからな。借りを作っておくのも気持ち悪いし、それでチヤラつてことにしといてくれ」

「え、でも、もともとは自分の蒔いた種ですし、それにあれは慰めたわけでもないですし……」

共に夕食を摂ったアヤカの様子を思い出す。オーナーに対してツンケンして強く当たり、かと思えば俺に注意を受けてモジモジしたりと、とてもではないが慰められて元に戻った状態とは思えない。

俺と同じことを思い出していたのか、オーナーが苦い顔をしてまとめる。

「色々悩む年頃なんだろ」

「はあ……」

苦笑しながら相槌を打っておく。

「ま、なんにしる部屋から出てきて、話も聞いてくれるようになって」

たんだ。あとは父親が頑張るしかないだろ？ 彼氏に負けてられるかよ」

「俺は彼氏じゃないですけどね。……なんて言うか、その、頑張ってください」

「おう、任せとけ」

オーナーは歯を見せてニイと笑う。この笑顔を向けられると何故か毎回元気づけられてしまう。オーナーは人を元気にする魔法を使っているんじゃないかって思うくらいだ。

「じゃ、俺はもう行きます。ありがとうございました」

最後にもう一度軽く会釈をして、歩き出す。

「金払わなくていいからって、バイトサボるんじゃないぞ」

「分かってますって」

背後から聞こえてきた声に振り返らずに返事をしながら、家に挟まれた細い路地を抜けて、道路に出る。

太陽はほとんど沈んでしまっていて辺りは薄暗い。

家路を行きながら、心の中で今は亡き母親に語りかける。

『見てるか、母親さんよお？ あんた言ってたよな、俺は超能力が使えるから特別なんだって。……だがよ、そんな特別さがなんの役に立つ？ 肝心なところで役立たずだ。誰も幸せになんてできねえ。俺にはオーナーの使う笑顔の魔法のほうがよくよ。価値のあるものに見えるんだが、あんたはどうよ？』

もちろん返事はないし、期待もしていない。あつたとしても気分が悪くなるだけだ。

「死人に口なし、脳もなし」と

呟き、いつの間にか晴れていた空の下を軽い足取りで進む。遠くに見える空の端は赤い。そのすぐ上には白い三日月が浮かんでいた。

俺には紅い月を墮とす超能力があるらしい。色々と使用条件があるのだが、それでも一応、墮とせるらしい。正直なところ、母親が自殺の間際に残した狂言だったのだろうと思っている。信じていな

いけれど、小さい頃に植えつけられた思い込みってヤツはしつこいもんだ。今でも心のどこかでは自分が特別な人間なんじゃないかって期待している。

そんな醜い期待をさせるから紅い月は嫌いなんだ。もちろん他にも理由は色々ある。挙げればキリがないし、気分も悪くなるのでここでは省く。

とにかく俺は紅い月を嫌悪している。

しかし白い月まで嫌いというわけではない。どちらかというところ好きな分類に入る。

生命の介在しない、限りなく無機質な光。俺という人間のちっぽけな超能力が通用しない相手。そんな月が放つ光は不思議と神聖な存在に思える。

その白い光に照らされたところで幸せになれるわけではない。

けれどそんな光に照らされる世界が、アヤカとかオーナーとかついでにカツとか、そういう人たちが幸せに暮らせる世界なら、存続する価値があるのかなって。

俺が超能力を使えない意味もあるのかなって。

今はそう信じたい気分だ。

たとえば、俺が幸せじゃなかったとしても。

家出少女 1

大切な人の生き血を飲むこと。それが紅い月を墮とす条件のひとつ。

だから俺には月を墮とすことができない。

だってニヒルな俺には大切な人間なんていないから。

でも、もし 大切な人ができてしまったら。

はたして俺はその時、月が墮ちることを望むのだろうか？

西の空に沈みかけている上弦の月 半月は赤みがかつた黄色い光を放っている。汚れている、と思った。黄色人種の肌に近いその色は『人間の穢れ』を連想させる。

嫌いというわけではない。もちろん好きでもない。

黄色の月明かりに照らされていると、その光によって穢れを体内に取りこんでしまうような気がする。けれど、そんなことはどうでもよかった。俺はすでにどうしようもないほど穢れてしまっているのだから。

深夜の公園。街灯の光はベンチに座る俺に当たり、暗闇が佇む敷地の奥へと細い影を伸ばしていた。

足元には公園に住み着いている茶猫が二匹。俺が地面に放った一枚の食パンを競うように貪っている。

こうして何をするでもなくベンチに座っていても、現在進行形で食欲や睡眠欲が襲ってくることはない。

いつもならこの時間はすでに布団の中で熟睡しているはずだ。けれど今日は、布団に入っても一向に睡魔がやってくる兆しがなかった。

原因には覚えがない。昨日までは睡眠をいつも通りにとっていた

はずだから、それが理由とは思えない。かといって一週間前に苦しめられた風邪の影響なのか、とも考えてみたが、それにしても間が開き過ぎているのではないかと即座に打ち消す。

当たり前のことだがそんなことを延々と考えていたら眠気がやってこなくなるのはある種の道理。眠る努力を放棄した俺は、適度に身体を疲労させればいいのでは、と思い立って散歩をすることにした。それが一時間くらい前。

夜食にと、鞆の中から食パンを一枚取り出して家を出た。

予想はできたことだが、俺の脚は通い慣れたこの公園へと自然に向いてしまい、こうしてベンチで無為に時間を浪費するに至っている。食欲すらなかったので、食パンは一口も齧らないまま地面に放った。

遠くでパトカーのサイレンが鳴っている。警官に見つかると職務質問やら補導やらで面倒だな、などという考えが思考を過ぎたが具体的に対応策をとるでもなく、ぼんやりと黄色い月を眺め続ける。サイレンもパトカーも、まるで別世界の出来事だった。そこには、リアルがない。

自分にだけ、時間が流れていないような気がする。

周りは進んでいるのに、俺だけは立ち止まって毎日同じことの繰り返しかえし。それは自分が変わらないという点においては理想であったが、同時に限らない退屈を俺に強いることになっている。

だが、その退屈な状況から抜け出そうとする欲を、俺は持っていない。

それどころか今は、すべての欲が俺の中から消滅してしまったような気がする。食欲、睡眠欲、性欲。人間の三大欲求と呼称されるこれらの欲すらごっそりと消えている。

自分の中から何かが抜け落ちていくような感覚。

虚無感。空白感。喪失感。

どれも似ているようでこの感情の本質を言い表せてはいない。それは、悦び。快樂だった。

胸に微小な無数の穴が開く。そこから黒くて光沢を持った、石油と水銀が混ざったようなドロドロした液体が流れ出てきて、すぐに蒸発、霧散して消滅。

気化した液体は俺の中身であり本質であり、そして穢れでもある。『静見昇』の存在の希薄化に伴い、体内の穢れも薄まり浄化されていく。

つまり完全なる浄化は自己の喪失によってのみ成し得ると言えるが、それは矛盾だ。一方で自己の浄化を望みながら、もう一方では自己の消滅を望んでいる。……いや、もしかするとこのふたつは同じことなのかもしれない。すなわち、俺はもう救いようがないということ。消滅によってしか浄化することができない、根源的な穢れ。無意識下で自身のことをそうやって定義しているのか。

「はぁ」とため息が漏れる。

無意味な思考だった。この思考の果てにどんな場所にたどり着いたとしても、現実の俺は一ミリたりとも移動するわけではない。結果がゼロであるならば、原因がどれほどの値を持っていたとしても、その過程はゼロ以下なのだ。プラスにベクトルのない行為は無意味と呼称される。

でも、と思う。

変わらないことを願う俺は、どうして無意味な思考を忌避したのだろうか。前に進むことがないのなら、それでいいのではないか。

もしかすると、俺は『意味のある日々』を望んでいるのだろうか。

変化を望まないと言って自分を取り繕っても、心の奥底ではその逆のことを……

「それ、慈悲？」

そんな時だった。間近で響いた声に驚き、俺はいつの間にか閉じていた目を開けた。

俺の前、二メートルほどの空間を隔てた位置にその少女は立っていた。

月は雲に隠れていて辺りは薄暗い。だが、街灯の光が照らし出す少女の瞳は真っ直ぐに俺の足元　食パンを競い貪る二匹の茶猫に向けられている。

背中にまで流れる長い髪は茶髪が混じった黒色で、弱い風に時折揺れる。細められた目の奥の瞳の色は残念ながら暗くてよく見えな
いが、おそらくこちら黒だろう。鼻筋はわりと通っているほうで、色素が薄い唇は真一文字に結ばれている。服装は、上が赤いジャンパーで下はダメージジーンズ。両手は上着のポケットに突っ込まれていて、口からは周期的に白い息が漏れ出す。年はおそらく俺と同年代くらいだろう。

少女の視線は足元から上がり、俺の瞳へ。

……出来事にリアルがなかった。夢の中にいるのではないかと錯覚しそうな気分。

「それは慈悲なのかって訊いてるんだけど」

凜とした、それでいて冷たく突き刺さるような声。俺からの返答がなかったのが気に入らなかったのか、苛立たしげなモノを含んでいる。

『怒り』の感情の一種をぶつけられたことによって、俺が勝手に抱いていた少女の神秘性が崩れて、リアルが戻ってくる。夢見心地は壊れて、現実への復帰を強要。

そこで初めて、質問の意味を理解する。

「……エサやりのこと？」

確認のための問い。

「そう」

少女は短く答えて、首を小さく縦に振った。

肯定を確認した俺は足元へと視線を移す。いまだ二匹は食パンに食らいついている。相当腹が空いていたのだろうか。けれどそんなことは、俺にとって”どうでもいい”ことだ。

視線を少女へと戻す。

「ただの趣味だよ。俺は腹が空いた猫に慈悲を与えるような崇高な

人間じゃない」

嘘は吐いていないが、潔白な回答だと言い切れる自信もない。

俺がエサをあげているのは完全な趣味の領域での話だが、その領域内で茶猫に多くのパンを与えるという、ある種の慈悲に似た傲慢があつたのも事実だと思う。だがエサを与えるという俺の行為にはどうやっても崇高な意思を感じ取ることが不可能だつた。

脳裏には俺が幻想を抱いていた時の、目の前の少女の姿が映し出される。その姿は、現在の少女と寸分も違たがうことはないが、なにかが違う。神秘性とも言えるものを内包しているような気がした。

神秘性　俺の中には存在しないモノ。

穢れた俺が慈悲を与える姿など想像できない。

「ふっ」

つい、苦笑が漏れた。

想像できないのなら初めから答えは決まっているじゃないか。俺がこんなことを小難しく考える必要性はなかったんだ。

内側に向かつていた意識を外へ向ける。視線の先の少女は黙つたまま難しい顔で二匹の猫を見下ろしていた。俺の回答を吟味しているのだろうか。

やがて、彼女はふつと表情を緩めると数秒間だけ目を閉じた。

……ゆっくりと目を開き、ベンチに座る俺を見下ろす。

「あなたは、偽善者じゃないのね」

言つて、優しげに微笑した。

家出少女 2

「偽善者？」

疑問は鸚鵡返しとなって口から出る。訝かしみ、眉根が寄った。

「違う？」

少女は白い息の質問で返す。浮かべる微笑は崩れることなく、首をちょこんと傾げている。

……俺が偽善者かどうか、か。

そんなこと、今まで考えたこともなかったな。だがまあ、答えなんて一瞬で出る。考えるまでもない疑問だ。

「……確かに、俺は偽善者じゃないな」

偽善者とは善を偽る者。俺は善人なんてガラじゃないし、善人みたいになるうと思っただこともない。そして善い行いをしていない以上、偽善者ですらないわけだ。

「で、それがどうした？」

「ただの確認よ。あなたが偽善者じゃないかっていう。私、偽善者って嫌いな」

口調の端々から嫌悪感が滲み出ている。少女の顔は一瞬だが、憎々しげに歪む。　　が、すぐに微笑が復帰する。

「ねえ。隣、いい？」

視線が俺の隣　ベンチの空きスペースに向けられる。

「ああ、いいけど……」

視界の下端には、足元で食パンを競うように食べている茶猫二匹。パンはまだ半分くらい残っている。

「けど？」

「いや、なんでもない」

猫のことなんて気にするほどのことでもないだろう。

「そう……」

歯切れの悪い俺の言葉に気分を悪くしたのか、少女から微笑が消

える。

いつの間にか雲から顔を出していた半月が、後ろから彼女を照らしてこちらへ影を伸ばしていた。

ジャンパーのポケットに手を入れたままの彼女が一步踏み出す。街頭の光と黄色い半月の光、それぞれによって形作られたふたつの影も同時に一步踏み出した。そしてもう一度脚を上げ、トンと靴裏を地面につけた時、こちらへ伸びる月の影が茶猫二匹を覆った。

瞬時に食事を中断して一瞬だけ少女を振り返ると、ヒュウと風のように音もなく走り去る二匹。

「あつ……」

思わずといった感じで少女の口から漏れる言葉。二匹が消えていった方に悲しそうに目を遣っている。

黄色の月光で作られた影。光が汚れていれば、その光が作る影もまた同じ。穢れが触れたと分かったから二匹は逃げた……

まったく、俺は何を考えているんだ。

光が汚れているのだとすれば、影になるのはむしろ歓迎すべきことだ。だがそれでは理屈に合わない。俺は根本的に間違えているのだ。光が穢れているという考え方自体が問題。光の穢れは俺の精神の中だけでの感覚だ。猫が同じモノを共有しているはずがない。

「……あいつらは臆病だから」

無益な思考を停止させるために、意識の先を少女へとシフトさせる。

「でも……」

「別にあんたが悪いわけじゃない」

目の前にいる少女が茶猫の食事が中断される原因となったことは確かだが、それを予想していたにもかかわらず放置していた俺にも責任がある。客観を無視して主観だけで考えれば、悪いのは百パーセント俺だった。猫の食事を中断したくらいで罪悪感を抱くほど、俺の心は繊細にできていないのだが。

食べかけのパンを拾ってベンチから立ち上がると、猫が逃げている。

った茂みの方へ投げる。

ほとんど音もせず、落下、バウンドして転がったパンはちょうど茂みの手前までたどり着いた。

ベンチに腰を下ろす。

「あんたも座つたらどうだ」

少女は先程と同じ位置に立ったまま、俺が投げたパンとその奥の茂みをじっと見つめている。

「うん」

返事は上の空で、結局一步も動こうとしない彼女からは俺の提案に従おうとする意思は感じられない。

「そんなに見てると、あんたもパンを狙ってるって猫に勘違いされるぞ」

「……分かった」

少女はパンから眼を離すと、こちらに歩いてきてきてベンチに座つた。しばらく待っている、茂みの奥から一匹が顔だけを出し、こちらをじっと見てくる。少女のことを観察しているのだろうか。

「……………」

横を見ると、少女も猫に真剣な視線を向けていた。息を呑む気配が伝わってくる。

思わず、苦笑が漏れた。

「あんたが睨んでたら、いつまで経っても猫が出て来れないだろ」

少女がこちらを見上げた。意識が俺へと向いたその刹那 猫は茂みから身体を出すと、地面に落ちたパンを啜え、すばやく暗闇へ逃げ帰っていった。

「あっ」

すぐに視線を戻したようだが、猫の後姿を捉えることすらできなかったのだらう。

「気にすんな。あいつらは臆病だから、お前がパンを奪いに来たとしても思つて警戒しているんだろ」

「そつ……………」

少女は猫に対する興味を失ったかのように地面しかない前方に視線を固定した。だが、そっけない返事の中には落胆の響きが含まれていたように聞こえた。

「五年くらい前のことだけだよ」

そこまでで区切って横目で少女の様子をうかがってみたが、無言で前を見ているだけだった。これといった反応は示していない。続きを促がしているのか、それとも興味がないだけなのか……おそろくは後者だろうけれど、まあいい。どうせ俺の自己満足だ。

「さっきの茶色の猫二匹がここに住み着くようになったんだ。捨てられたのか、どこかから移ってきたのか、よく知らないけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0907n/>

紅い月

2010年10月8日13時30分発行